

紀 要

第 17 号

2004.3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

縄文遺跡の規模の格差とその推移

—住居・貯蔵穴・埋葬遺構・呪術具の数量からみた関西地方における検討—

瀬口 眞 司

1. 論点と結果の概要

遺跡の規模は、遺跡を形成した〔集団の規模〕、もしくはその土地の〔利用の累積度〕と深く関わる。この点を念頭に置きつつ、本稿では関西地方の縄文時代を対象とし、遺跡の規模とその遺跡間格差、その推移を整理する。

遺跡の規模は、単位時間当たりの①住居面積合計値、②貯蔵穴容量合計値、③埋葬遺構数、④呪術具出土数を用いて算出した。

その結果、縄文中期後葉以降、卓越した規模と標準的な規模の二者に分化すること、卓越した規模に至るのは一握りの遺跡で、ほか多数の遺跡は標準的な規模に留まることが見出せた。

以下、その根拠と詳細を述べる。

2. 検討対象と本稿の位置付け

(1) 検討の対象

対象時期は縄文早期前葉～晩期後半とし、対象地域は関西地方とする。ここでいう関西地方とは、福井・三重・滋賀・京都・兵庫・奈良・大阪・和歌山の8府県である。

遺跡の規模を導く際、遺跡の面積は取り扱わない。というのも、関西地方における遺跡の面積はきわめて算出しにくいからである⁽¹⁾。また、仮に算出できてもその意味するところを歴史的に評価することは困難に思えるからである⁽²⁾。

そこで今回は、住居面積や貯蔵穴容量の合計値、埋葬遺構数や呪術具出土数などから規模を導く⁽³⁾。これらの現状の事例数を整理することは、遺跡面積を算出するより容易で、しかも今後の展望に結び付け易いと考えからである。

(2) 本稿の位置付け

自身の研究戦略上、本稿は以下のように位置付ける。

早期前葉	ネガティブ押形文
中葉	ポジティブ押形文
後葉	条痕文
前期前葉	羽島下層Ⅰ式
中葉	羽島下層Ⅱ式～北白川下層Ⅱa式
後葉	北白川下層Ⅱb式～大歳山式
中期前葉	鷹島式～船元Ⅰ式
中葉	船元Ⅱ式～船元Ⅳ式
後葉	里木Ⅱ式・咲畑式～北白川C式
後期前葉	中津式～北白川上層Ⅱ期
中葉	北白川上層Ⅲ期～元住吉山Ⅰ式
後葉	元住吉山Ⅱ式～宮滝式
晩期前半	滋賀Ⅰ式～Ⅲa式
後半	篠原式～長原式

表1 時期区分

①おおまかな「単位時間」ごとの数値を用いた俯瞰作業とする。

今回の論点には、絶対年代と整合済みの細別土器型式をタイムスケールとして用いる必要が本来はある。また、そのタイムスケールに基づいた各遺跡の形成過程論も必要である。しかし、そのような検討に耐えうる資料はまだない。

そこで、今回はおおまかな「単位時間」ごとに数値を求め、それを用いた俯瞰作業として検討を行う。ここで用いる単位時間は、表1で示す細別時期区分をあてる。データの集計、傾向の観察は、この単位時間をもとに行う。

なお、放射性炭素年代（未校正）を勘案し、縄文前期前葉以降の単位時間の長さは約330年とみなす。一方、縄文早期前葉～後葉の各時期の長さは約3倍の1000年前後とみなしている。そこで、縄文前期前葉以降との整合をはかるために、早期後葉以前のデータには1/3をかけて補正する。

また、複数の単位時間にまたがる資料は、便宜上、その単位時間の数で除して、各単位に配分した。たとえば、ある遺跡で縄文後期前葉～後葉の貯蔵穴が検出され、その容量合計値が30立方m（以下立米とする）だった場合、前葉・中葉・後葉に10立米ずつ割り振った。

②傾向の把握に主眼を置いた作業とする。

①で示したのと同様な理由から、厳密な検討はまだ不可能な状態にある。そこで本稿では、現状での目安としての数値を算出する。そして、それが示す差異・推移から傾向を読み取ることに主眼を置くことにする⁽⁴⁾。

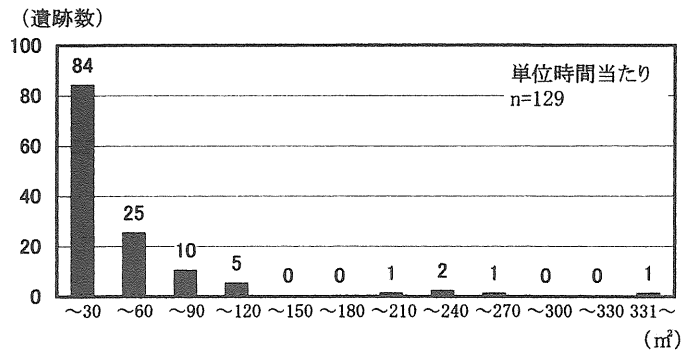


図1 該当遺跡の住居面積合計値の度数分布

3. 住居面積合計値の遺跡間格差とその推移

(1) 作業の条件と目的

住居検出遺跡(以下、該当遺跡とする)を対象とし、単位時間当たりの住居面積合計値を該当遺跡ごとに算出し、その数値をもとに遺跡間の格差とその推移を問う。

住居から社会の規模を推理した先行研究には、今村啓爾の成果⁽⁵⁾がある。そこでは住居の数が問題にされた。

しかし、1人当たりの住居占有面積が縄文時代を通じてどこでもほぼ変わらないと考えた時、該当遺跡に居住した人間の規模は、住居の数より面積で算出の方が合理的である。そこで本稿では、住居面積を検討対象とする。

ここで住居として取り扱うのは、竪穴住居・平地式住居・掘立柱建物である。このうち、平地式住居や掘立柱建物といった非竪穴住居については、居住以外の施設や、季節的で一時的な施設とみる立場⁽⁶⁾がある。従って、居住に関する「集団の規模」などを考察する際には除外する必要もある。

しかしながら、その反面、後晩期については「竪穴住居を補完ないしは凌駕する状態で掘立柱建物が存在」していることから、非竪穴住居を通常の住居として認知する必要も指摘されている⁽⁷⁾。

本稿での論点を検討するにあたり、いずれの立場をとるべきか、現状ではその結論を出せていない。そこで今回は、試みとして非竪穴住居も住居と認識して作業に取りかかることにする。

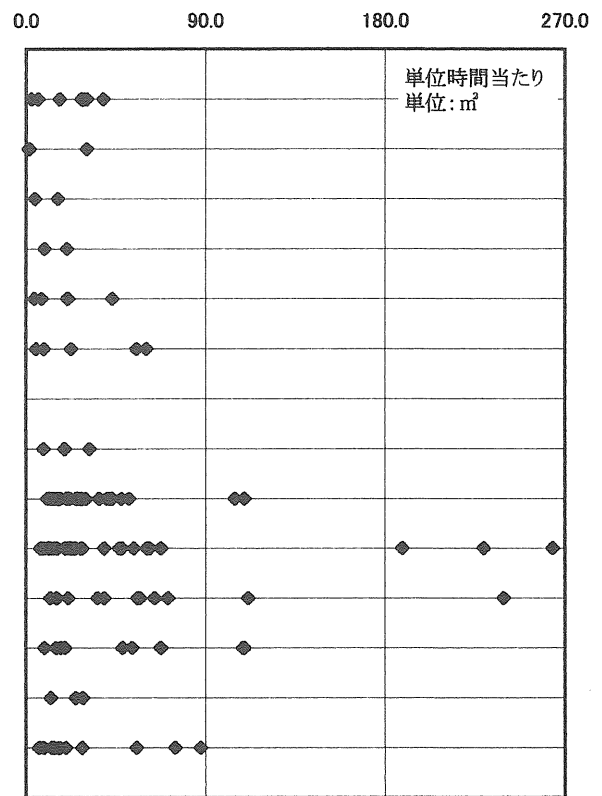


図2 該当遺跡の住居面積合計値

該当遺跡の住居面積合計値は、関西縄文文化研究会の資料集成結果⁽⁸⁾をもとに算出する。各棟の面積は概算値とし、方形・長方形の面積は長軸×短軸で、円形住居は $\pi \times \text{半径} \times \text{半径}$ で算出した。楕円形・長円形住居は、 $\pi \times (\text{長径} \div 2) \times (\text{短径} \div 2)$ で近似値を求めた。

(2) 住居面積合計値の遺跡間格差

該当遺跡の住居面積合計値(単位時間当たり)を算出し、度数分布図でそれを示すと、図1のようになる。

この図からは、概ね2つの分布範囲が読み取れる。1群は120㎡以下の範囲、2群は181㎡以上の範囲である。

1群の範囲には、約96%の該当遺跡が属している。大半の遺跡が当てはまるという意味で、この範囲が住居面積合計値（単位時間当たり）の「標準」だったと判ぜられる。

一方、2群の最小値181㎡と、1群の最大値120㎡の間には、1.5倍以上の格差がある。この点から、2群に含まれる遺跡は、関西縄文社会の中では「卓越」した規模にあったと評価できる。

(3) 縄文中期後葉に現れ始める遺跡間格差

上記のとおり、該当遺跡の住居面積合計値には、「標準」的な規模と「卓越」した規模の2者が確認できた。

このような遺跡間格差の時間的差異はどうか。この点を問うために、該当遺跡の住居面積合計値（単位時間当たり）の分布を、細別時期ごとに示す（図2）。

1群規模の遺跡は、どの細別時期でも確認できる。このことから、1群規模の遺跡はより普遍的な存在だったと評価できる。

一方、2群規模の遺跡が確認できるのは、縄文後期前葉～縄文後期中葉にほぼ限られる⁽⁹⁾。居住規模における遺跡間格差は、どの時期でも明瞭だったわけではなく、この期間に特に明瞭化したことがうかがえる⁽¹⁰⁾。

なお、縄文中期後葉～後期後葉には、1群規模の範疇だがやや大きいクラス（61～120㎡）の遺跡が目立つようになる⁽¹¹⁾。2群規模の遺跡が顕在化する直前に、遺跡間格差は現れ始めている。

以上のことから、住居面積合計値における遺跡間格差の推移は、次のように整理できる。

- ① 縄文中期中葉までは、遺跡間格差は不明瞭か、もしくは僅少である。
- ② 縄文中期後葉になると、やや卓越した規模の遺跡が形成されるようになり、遺跡間格差が明瞭になり始める。
- ③ 縄文後期前葉～後期中葉には、それまでよりかなり卓越した2群規模の遺跡が形成され、遺跡

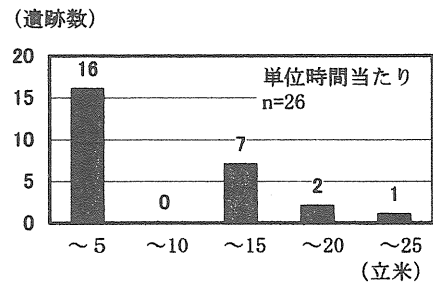


図3 該当遺跡の貯蔵穴容量合計値の度数分布

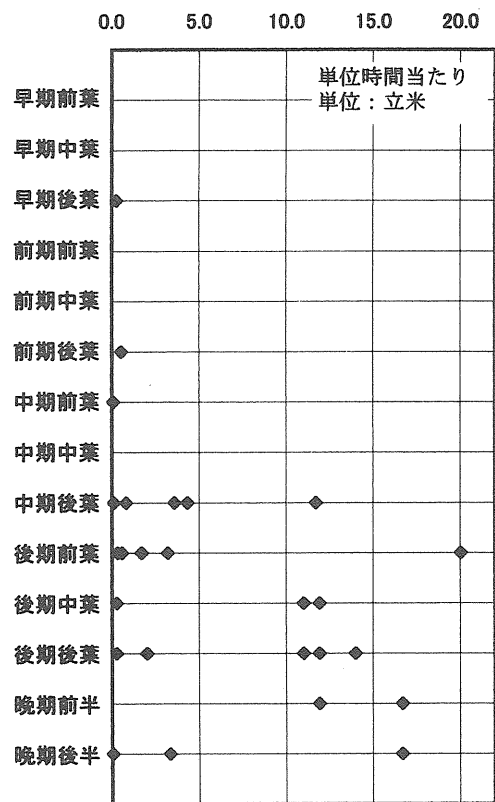


図4 該当遺跡の貯蔵穴容量合計値細別時期ごとの分布

間格差が特に明瞭化する。

- ④ 縄文後期後葉以降は2群規模の遺跡が確認されなくなり、遺跡間格差は再び不明瞭か、もしくは僅少になる。

4. 貯蔵穴容量合計値の遺跡間格差とその推移

(1) 作業の条件と目的

貯蔵穴を検出した各遺跡（以下、該当遺跡とする）を対象とし、単位時間当たりの貯蔵穴容量合計値を算出し、遺跡間の格差とその推移を問う。

貯蔵穴の数ではなく、その容量合計値から、延べ

の貯蔵規模を求める理由は、前章における住居での作業とほぼ同様である。

貯蔵穴として取り扱う遺構とその容量は、関西縄文文化研究会の資料集成結果⁽¹²⁾をもとに集計・算出する。容量の値は概算値とし、上面の面積×深さで求めた。

(2) 貯蔵穴容量合計値の遺跡間格差

該当遺跡の貯蔵穴容量合計値（単位時間当たり）を算出し、度数分布図でそれを示すと、図3のようになる。

この図から概ね2つの分布範囲が読み取れる。1群は5立米未満の範囲、2群は10立米以上の範囲である。

1群の範囲には、全体の過半数以上（約61%）の該当遺跡が属している。大半の遺跡が当てはまるという意味で、この範囲が貯蔵穴容量合計値（単位時間当たり）の「標準」だったと判ぜられる。

一方、2群の最小値10立米と、1群の最大値5立米の間には、2倍以上の格差がある。この点から、2群に含まれる該当遺跡の貯蔵規模は、関西縄文社会の中では「卓越」していたといえる。

(3) 縄文中期後葉以降に明瞭化する遺跡間格差

上記のとおり、該当遺跡の貯蔵穴容量合計値には、「標準」的な規模と「卓越」した規模の2者が確認できる。

このような遺跡間格差の時間的差異はどうか。この点を問うために、該当遺跡の貯蔵穴容量（単位時間当たり）の分布を、細別時期ごとに示す（図4）。

1群規模の遺跡は、（欠落時期が途中にあるもの）縄文早期後葉から晩期後半にかけて確認できる。このことから、1群規模はほとんどの時期にみられる、より普遍的なあり方だったといえる。

一方、2群規模の遺跡が確認できるのは、縄文中期後葉以降である⁽¹³⁾。貯蔵規模における遺跡間格差は、時期を通じて明瞭だったわけではなく、2群規模の遺跡が出現した縄文中期後葉以降に明瞭化したといえる。

以上のことから、貯蔵穴容量合計値における遺跡間格差の推移は、次のように整理できる。

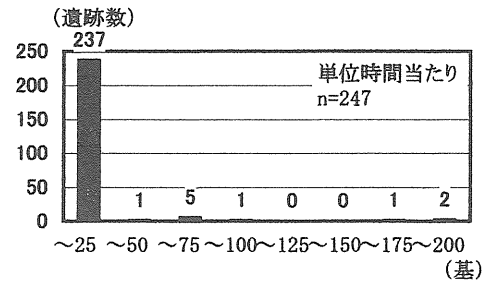


図5 該当遺跡の埋葬遺構数の度数分布

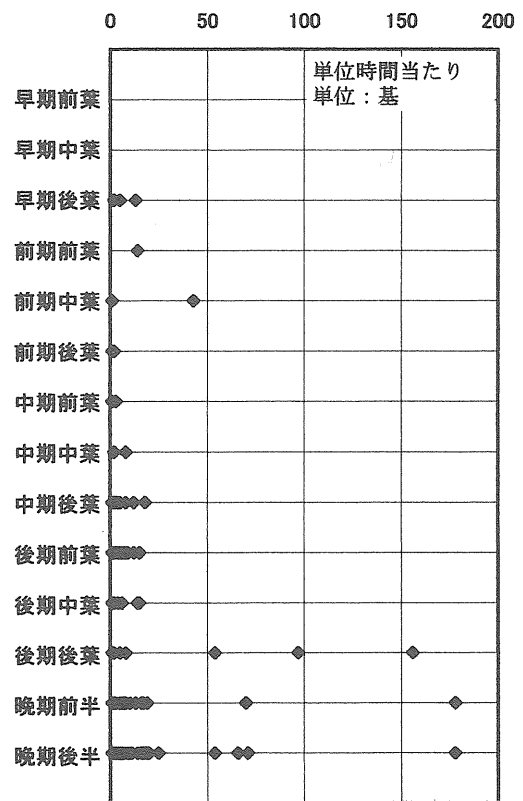


図6 該当遺跡の埋葬遺構数細別時期ごとの分布

- ① 縄文中期後葉までは、遺跡間格差は不明瞭である。
- ② 縄文中期後葉～晩期後半には、卓越した貯蔵規模の遺跡が形成され、遺跡間格差が明瞭化する。

5. 埋葬遺構数の遺跡間格差とその推移

(1) 作業の条件と目的

埋葬遺構を検出した各遺跡（以下、該当遺跡とする）を対象とし、単位時間当たりの埋葬遺構数を算出して、遺跡間格差とその推移を問う。埋葬遺構として取り扱う遺構は、関西縄文文化研究会の資料集

成結果など⁽¹⁴⁾をもとに集計する。

(2) 埋葬遺構数の遺跡間格差

該当遺跡の埋葬遺構数（単位時間当たり）を算出して度数分布で示すと、図5のようになる。

この図からは、概ね2つの分布範囲が読み取れる。1群は25基以下の範囲、2群は50基を越える範囲である。

1群の範囲には、約96%の該当遺跡が属している。大半の遺跡が当てはまるという意味で、この範囲が埋葬遺構数（単位時間当たり）の「標準」だったと判ぜられる。

一方、2群の最小値50基と、1群の最大値25基の間には、2倍以上の格差がある。この点から、2群に含まれる遺跡の埋葬遺構数の規模は、関西縄文社会の中では「卓越」したものだったといえる。

(3) 縄文後期後葉以降に明瞭化する遺跡間格差

上記のとおり、該当遺跡の埋葬遺構数には「標準」的な規模と「卓越」した規模の2者が確認できる。

このような遺跡間格差の時間的差異はどうか。この点を問うために、該当遺跡の埋葬遺構数（単位時間当たり）の分布を、細別時期ごとに示す（図6）。

1群規模の遺跡は、縄文早期後葉以降に限ってみれば、どの細別時期でも確認できる。従って、後述する2群規模の遺跡よりも普遍的なあり方だったといえる。

一方、2群規模の遺跡が確認できるのは、縄文後期後葉以降にほぼ限られる⁽¹⁵⁾。埋葬規模における遺跡間格差は、時期を通じて明瞭だったわけではない。2群規模が出現した縄文後期後葉以降に、遺跡間格差は特に明瞭化したといえる。

以上のことから、埋葬遺構数における遺跡間格差の推移は、次のように整理できる。

- ① 縄文後期中葉までは、遺跡間格差は基本的には不明瞭か、もしくは僅少である。
- ② 縄文後期後葉～晩期後半になると、2群規模の遺跡が現れ、卓越した規模の墓群が形成され始め、遺跡間格差が特に明瞭になる。

6. 呪術具出土数の遺跡間格差とその推移

(1) 作業の条件と目的

呪術具出土遺跡（以下、該当遺跡とする）を対象とし、単位時間当たりの呪術具数を算出して、遺跡間の格差とその推移を問う。

ここで呪術具とするのは石製呪術具（石棒・石刀・石剣・独鈷石・御物石器など）、土製呪術具（土偶・土面）である。これらは、小林青樹・大下明・中村健二の各氏らの業績や⁽¹⁶⁾、および「土偶とその情報」研究会の成果⁽¹⁷⁾をもとに検索・集計した。

(2) 石製呪術具・土製呪術具出土数の遺跡間格差

石製呪術具

該当遺跡の石製呪術具出土数（単位時間当たり）を算出し、度数分布図でそれを示すと図7のようになる。

この図から、概ね2つの分布範囲が読み取れる。1群は15個未満の範囲、2群は15個以上の範囲である。

1群の範囲には約97%の該当遺跡が属している。大半の遺跡が当てはまるという意味で、この範囲が石製呪術具出土数（単位時間当たり）の「標準」だったと判ぜられる。

一方、2群の最小値と、1群の最大値の間には、大きな格差はない。従って、2群遺跡における石製呪術具出土数の卓越性は顕著でないかもしれない。

ただ図8を参照すると、2群を2つの小群に分けて考えることも可能であろう。15個以上30個未満の2a群、31個以上の2b群である。

この2b群に着目すると、その最小値は31個で、1群の最大値15に比べて2倍以上となる。

従って、2b群に含まれる遺跡の出土規模は、関西縄文社会では「卓越」していたといえる。

土製呪術具

該当遺跡の土製呪術具出土数（単位時間当たり）を算出し、度数分布図でそれを示すと、図9のようになる。

この図からは、概ね2つの分布範囲が読み取れる。1群は10個以下の範囲、2群は20個以上の範囲である。

1群の範囲には約93%の該当遺跡が属している。

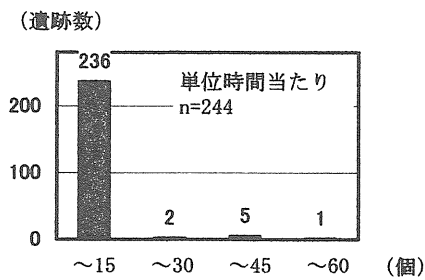


図7 該当遺跡の石製呪術具出土数の度数分布

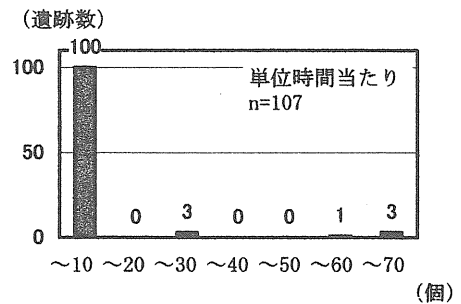


図9 該当遺跡の土製呪術具出土数の度数分布

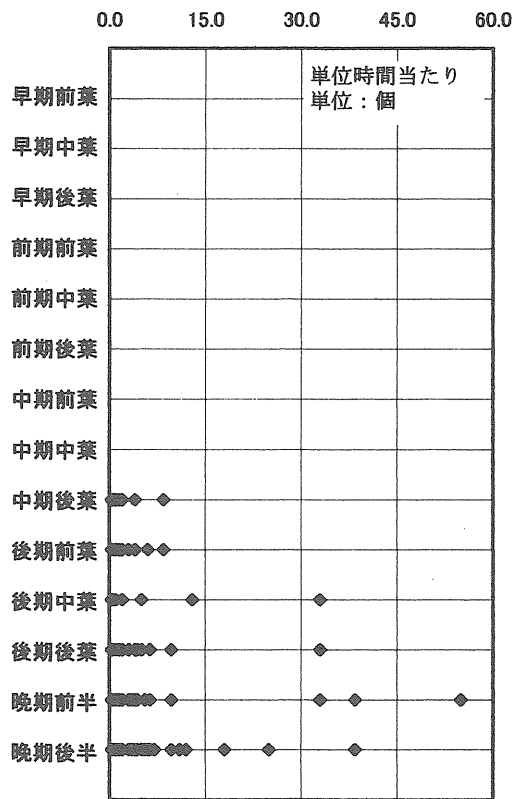


図8 該当遺跡の石製呪術具出土数 細別時期ごとの分布

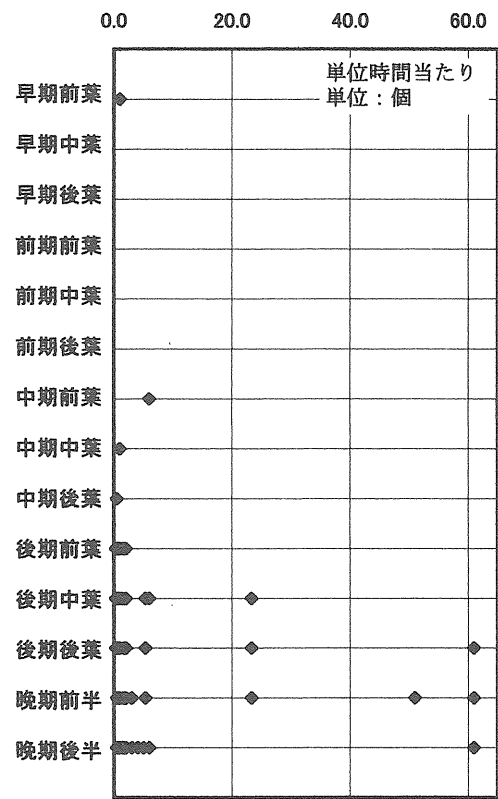


図10 該当遺跡の土製呪術具出土数 細別時期ごとの分布

大半の遺跡が当てはまるという意味で、この範囲が土製呪術具出土数（単位時間当たり）の「標準」だったと判ぜられる。

一方、2群の最小値20個と、1群の最大値10個の間には、2倍以上の格差がある。この点から、2群に含まれる遺跡の土製呪術具数の出土規模は、関西縄文社会では「卓越」したものだったといえる。

(3) 縄文後期中葉以降に明瞭化する遺跡間格差

上記のとおり、該当遺跡の間には、「標準的な規模の遺跡」と「卓越した規模の遺跡」の2者が確認

できた。

これらの遺跡間格差はどのような推移をたどるのか。この点を問うために、該当遺跡の出土石製呪術具数・土製呪術具数の各分布を、細別時期ごとに示す（図8・10）。

石製呪術具（図8）

1群規模の遺跡は、縄文中期後葉～晩期後半に存在し、後述する2群よりも多くの時期で確認される。その意味でより普遍的なあり方だったといえる。

一方、2群規模の遺跡が確認できるのは、縄文後期中葉～縄文晩期後半である⁽¹⁸⁾。石製呪術具の出

土量における遺跡間格差は、時期を通じて明瞭だったわけではない。2群規模が出現した縄文後期中葉以降に、遺跡間格差は特に明瞭化したといえる。

以上のことから、出土石製呪術具数における遺跡間格差の推移は、次のように整理できる。

- ① 縄文後期前葉までは、遺跡間格差は不明瞭もしくは僅少である。
- ② 縄文後期中葉～晩期後半になると、それまでより卓越した出土規模をもつ遺跡が形成され、遺跡間格差が明瞭になる。

土製呪術具 (図10)

1群規模の遺跡は、(欠落する時期が途中にあるものの) 縄文早期前葉・中期後葉～晩期後半に存在し、後述する2群よりも多くの時期で確認される。その意味で、より普遍的なあり方だったといえる。

2群規模の遺跡が確認できるのは、縄文後期中葉～縄文晩期後半に限られる⁽¹⁹⁾。土製呪術具の出土量における遺跡間格差は、時期を通じて明瞭だったわけではない。2群規模が出現した縄文後期中葉以降に、遺跡間格差は特に明瞭化したといえる。

以上のことから、出土土製呪術具数における遺跡間格差の推移は、次のように整理できる。

- ① 縄文後期前葉までは、遺跡間の格差は不明瞭もしくは僅少である。
- ② 縄文後期中葉になると、それまでより卓越した出土規模をもつ遺跡が形成され、遺跡間格差が明瞭になる。そして、その傾向は縄文晩期後半まで続く。

7. 結論と展望——遺跡規模の格差とその推移

(1) 結論

本稿では、関西地方における遺跡の規模、その格差、その推移について整理した。

その結果、次のような遺跡間格差が各項目で確認できた。標準的な規模の1群と卓越した規模の2群である。

このうち多数を占めるのは1群で、2群は少数派である。

ただし、その格差は時期を通じていつも明瞭だっ

		住居面積 合計値	貯蔵穴容 量合計値	埋葬遺構 数	石製呪術 具数	土製呪術 具数
早期	前葉	+				+
	中葉	+				
	後葉	+	+	+		
前期	前葉	+		+		
	中葉	+		+		
	後葉	+	+	+		
中期	前葉		+	+		+
	中葉	+		+		+
	後葉	○	●	+	+	+
後期	前葉	●	●	+	+	+
	中葉	●	●	+	●	●
	後葉	○	●	●	●	●
晩期	前半	+	●	●	●	●
	後半	+	●	●	●	●

●は卓越する規模、○はやや卓越する規模の存在時期を示し、+は標準的な規模のみの存在を示す。

図11 各項目における「卓越」する規模の出現と推移

たわけではない。遺跡間の規模の格差が明瞭になるのは、縄文中期後葉以降である。この時期以降、関西縄文社会の一部において、遺跡形成〔集団の規模〕か、もしくは特定の土地に対する〔利用の累積度〕が増大した可能性が考えられる。

(2) 展望

本稿の検討からいくつかの研究展望が新たに生まれる。最後にこれを示して稿を閉じる。

① 2群遺跡の類型とその推移

縄文中期後葉に出現した2群遺跡にも、いくつかの類型が見出せる。その各類型の消長には時間的な差異があるようにみえる(図11)。

縄文中期後葉～後期前葉は、住居を伴う集落型の類型が2群の主体を占める。初期の2群遺跡は集落型の大規模遺跡として成立したようだ。

しかし、縄文後期中葉になると、住居を伴わず、貯蔵機能や葬祭機能に特化した類型が目立ち始める。そして、縄文晩期前半になると、葬祭機能に特化した類型が主体になっていくのである。

反面、住居を伴う2群遺跡は姿を消し、集落型の遺跡は1群規模に収斂していくかにみえる。

これらの消長・推移は、「集団の紐帯原理」の変化に起因する可能性がある。この点を念頭に入れた詳細な検討が重要な研究展望の1つである。

② 2群遺跡の形成要因

遺跡の規模は、その土地を利用した集団の規模、もしくは利用の累積の程度によって決まる。

個々の2群遺跡の形成要因も、集団規模の拡大か、累積度の増大に求めるべきだろうが、そのいずれが主要因なのかはまだ判断できない。それぞれの遺跡の形成過程を踏まえた上での説明が、今後の研究展望の1つである。

この作業は、2群遺跡を生み出した社会的要因の解明にも繋がる。その点でも重視したい。

③ 1群遺跡へのまなごしの保持

以上のように、研究対象として目を引くのは2群遺跡である。しかし、一般的に存在していたのは1群遺跡である。関西縄文社会とその歴史を分析していくには、特殊事例である2群だけでなく、一般的な事例である1群にもまなごしを注いでいく必要がある。この2者を等しく照らしながら社会分析を進めることも研究展望の一つである⁽²⁰⁾。

（せぐちしんじ：企画調査課主任技師）

謝 辞

本稿を成すにあたり、長田友也さんからは貴重なご教示を頂きました。また、第121回近江貝塚研究会（2003年11月23日）での以下の各氏のご意見も参考になりました。感謝いたします。

佐藤啓介、早坂廣人、石村智、鈴木康二、辻川哲朗、小島孝修、井上智代、山口早苗の各氏。

註

(1) 遺跡面積を算出するには、遺跡とその範囲確定が必要になる。しかし、関西地方における「遺跡」と「遺跡範囲」は、行政的判断としての「埋蔵文化財包蔵地」を指す場合が大半で、ここで問題にしたい内容を算出するデータにはなりにくいので、面積は対象から除外する。

このような姿勢をとるとき、現状で認識されている「遺跡」までも作業から捨て去らなければならないが、そうすると作業単位を失うことになるので、ここでは便宜上、「遺跡」を単位として扱い続けることにする。

(2) 遺跡面積が示す意味は様々であり、本稿の論点には結び付けにくい。

(3) これらの該当資料が全くみられない遺跡の取り扱いについては、今後の課題とし、本稿では問わない。

なお、住居・貯蔵穴・埋葬遺構・呪術具を検討対象に

選んだ理由は、それらが地点の機能の推察にしばしば用いられる研究傾向にあり、本稿の最後に述べる自身の今後の研究展望に結びつけやすいからである。

(4) 全ての過去資料が発掘されているわけではない。また、既に指摘されているように西日本の縄文遺跡の多くは沖積平野の地下深くにあるために発見されにくい（西田正規『縄文時代の環境』岩波書店1985）。従って、未発見の過去資料は少なからず存在しており、そのような状況から現状での数値を絶対視したり、絶対数と見なすことはできない。そこで本稿では目安の数値を示し、その相対的差異・推移から傾向を把握することに主眼を置くことにする。

(5) 今村啓爾『縄文時代の住居址数と人口の変動』『住の考古学』同成社1997

(6) 麻柄一志『夏の家と冬の家』『同志社大学考古学シリーズV考古学と生活文化』1992

瀬口眞司「縄文時代の琵琶湖周辺における人類の適応—環境の変化と居住形態の推移から考える—」『第50回埋蔵文化財研究集会』2001ほか。

(7) 武藤康弘「竪穴住居と半定住」『帝京大学山梨文化財研究所研究集会報告集3』2000

(8) 関西縄文文化研究会編『関西の縄文住居』1999

(9) 後期前葉：福井県右近二郎遺跡（188.6㎡）・滋賀県正楽寺遺跡（229.4㎡）・同県小川原遺跡（263.9㎡）、後期中葉：京都府森山遺跡（239.3㎡）。

(10) 図示していないが、縄文晩期後半になると、700㎡を越える遺跡（三重県宮山遺跡）が現れる。しかし、これは極めてイレギュラーな存在なので、今回の評価からはひとまずはずしておく。

(11) 中期後葉：三重県大垣内遺跡（104.7㎡）・福井県右近二郎遺跡（109.4㎡）、後期中葉：兵庫県佃遺跡（111.5㎡）、後期後葉：三重県森添遺跡（108.8㎡）・滋賀県穴太遺跡（109.4㎡）。

(12) 関西縄文文化研究会編『関西縄文時代の生業関係遺構』2001

(13) 中期後葉：大阪府讃良川遺跡（11.71立米）、後期前葉：滋賀県正楽寺遺跡（20.04立米）、後期中葉：兵庫県佃遺跡（11.00立米）・奈良県本郷大田下遺跡（11.92立米）、後期後葉：三重県追上遺跡（13.98立米）・前掲佃遺跡（11.00立米）・前掲本郷大田下遺跡（11.92立米）、晩期前半：三重県森脇遺跡（16.69立米）・前掲本郷大田下遺跡（11.92立米）、晩期前半：前掲森脇遺跡（16.69立米）。

(14) 関西縄文文化研究会編『関西の縄文墓地』2000

ただし、大阪府向出遺跡の値は財大阪府文化財調査研究センター編『調査報告書第55集』をもとに補正した。また、滋賀県滋賀里遺跡および北仰西海道遺跡の値は、小島孝修氏の集計（「近江における縄文社会の展開過程に関する覚え書き—地域の検討4」『紀要第12号』・「同検討6」『同第14号』財団法人滋賀県文化財保護協会1999・

同2001) をもとに算出した。

(15) 後期後葉：三重県天白遺跡 (54基)・滋賀県北仰西海道遺跡 (97基)・大阪府向出遺跡 (156基)、晩期前半：滋賀県滋賀里遺跡 (70基)・前掲北仰西海道遺跡 (178基)、晩期後半：滋賀県弘部野遺跡 (54基)・福井県金剛丸遺跡 (60基)・前掲滋賀里遺跡 (71基)・前掲北仰西海道遺跡 (178基)。ほか、縄文前期中葉にも2群遺跡(大阪府国府遺跡)が確認できるが、イレギュラーな存在なので、今回の評価からは捨象しておく。

(16) 小林青樹編『考古学資料集17 縄文・弥生移行期の石製呪術具2』2001。

ただし、三重県天白遺跡のデータについては三重県埋蔵文化財センター編『三重県埋蔵文化財調査報告108-2』1995をもとにした。

(17) 「土偶とその情報」研究会編『西日本をとりまく土偶』1997。

(18) 後期中葉：三重県天白遺跡 (33個)、後期後葉：前掲天白遺跡 (33個)、晩期前半：滋賀県滋賀里遺跡 (39個)・大阪府馬場川遺跡 (55個)・前掲天白遺跡 (33個)、晩期後半：大阪府長原遺跡 (25個)・兵庫県口酒井遺跡 (18個)・前掲滋賀里遺跡 (39個)。

(19) 後期後葉：奈良県橿原遺跡 (61個)、晩期前半：大阪府馬場川遺跡 (51個)・前掲橿原遺跡 (61個)、晩期後半：前掲橿原遺跡 (61個)。

(20) 大規模遺跡だけに注視することの危険性については、黒尾和久(「縄文時代中期の居住形態」歴史評論No454 (1998年))らが早くから問題視している。

(2003年11月30日脱稿)

編集後記

紀要第17号をお届けいたします。今号は8本の原稿を掲載することができました。内容等も、縄文時代から近世にまで至る、様々な時代を対象にしています。

この紀要を職員の研究活動の成果として、今後もさらに研鑽をつんでいきたいと考えておりますので、皆様からの積極的なご叱正・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

(K.S.)

平成16年(2004年)3月

紀 要 第17号

編集・発行：財団法人滋賀県文化財保護協会

滋賀県大津市瀬田南大萱町1732-2

TEL：(077) 548-9780

FAX：(077) 543-1525

URL：http://www.shiga-bunkazai.jp

E-mail：mail@shiga-bunkazai.jp

印刷・製本：宮川印刷株式会社